

漂着 する 思考

Exhibition of Creativity and Innovation

新屋浜をめぐる現代作家との対話

漂着

有相無相の漂着物が、〈風土〉を形成する

思考

漂着 する 思考

Exhibition of Creativity and Innovation

新屋浜をめぐる現代作家との対話

主催 公立大学法人秋田公立美術大学、
NPO法人アーツセンターあきた(秋田市文化創造館指定管理者)
企画制作 NPO法人アーツセンターあきた
助成 芸術文化振興基金、公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団





秋田の〈風土〉を根幹とする 表現の可能性

公立大学法人秋田公立美術大学とNPO法人アーツセンターあきた（秋田市文化創造館指定管理者）は、2024年7月20日から8月4日まで、秋田の〈風土〉を根幹とする表現の可能性に迫る展覧会「漂着する思考 -新屋浜をめぐる現代作家との対話-」を秋田市文化創造館において開催いたしました。

深い雪をかき分けて来訪神が訪れ、新屋浜にはクジラが漂着し、山並みから里に熊が訪れる土地。秋田ではこれらが〈風土〉として語られる一方、美術においても重要な要素となり、表現者の思考に影響を与えてきました。作品や記録、表現者が残した痕跡もまた、〈風土〉を形成する有相無相の漂着物と捉えることができるでしょう。

本展では、「領域横断」「複合芸術」を教育方針として昨年度開学10周年を迎えた秋田公立美術大学の卒業生優秀作品と、秋田を拠点に活躍するアーティストによる絵画やインスタレーション作品に加え、前身である秋田公立美術工芸短期大学時代から収蔵する工芸作品等によって「漂着する思考」を提示します。表現者の思考と記録、痕跡や残像を漂着物に喩えながら、工芸から現代アートまで、秋田の〈風土〉を根幹とする表現の多様性と可能性に迫りました。5人の現代作家と収蔵作品7点による展覧会について、ここに報告いたします。

本展の開催におきましては、独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団をはじめ、関係者のみなさまに多大なるご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

公立大学法人秋田公立美術大学
NPO法人アーツセンターあきた（秋田市文化創造館指定管理者）

目次

Contents

01	秋田公立美術大学収蔵作品	12
02	後藤那月 〈知覚〉の在処	16
03	矢崎舞子キアラ 未知の〈音色〉	20
04	おおだいらまこ 記録すること、記憶すること 絵画を描くこと	24
05	大東 忍 〈風景〉を供養する	28
06	月居 凜 確かに挿れ動くもの	32
07	関連イベント アーティストトーク・土楽器ライブ	36
08	アーカイブ	37
09	出品作品リスト	38







01 | 秋田公立美術大学収蔵作品
Collection Works

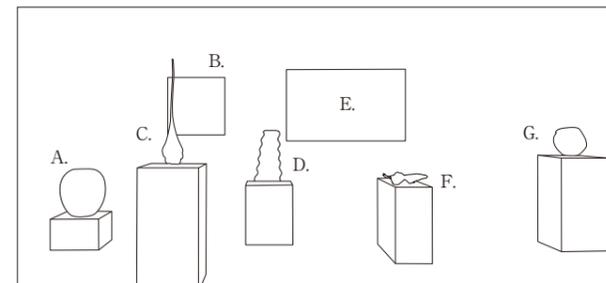
国重要無形民俗文化財が数多く存在する秋田には、ナマハゲや人形道祖神といった文化人類学的視点が重要な要素となり、表現を生み出す根幹となっている。一方、江戸時代から続く銀線細工をはじめとする工芸技術は、秋田市立工芸学校、秋田公立美術工芸短期大学へと受け継がれ、その歴史を背景に制作された工芸作品等が秋田公立美術大学に多数保管されている。さまざまな素材、さまざまな手法を試みた学生作品の数々は、この〈風土〉から生まれた表現の記録であり、表現者の試行錯誤の痕跡でもある。本展では、大学が収蔵するこれら短大時代からの工芸を中心とする作品と、秋田をルーツのひとつとする現代作家の作品とがコラボレーションする。



戸田雅子《うるしオブジェ》木・漆
秋田公立美術工芸短期大学 2003 年度優秀賞



- | | | |
|--|---|---|
| <p>A. 石毛彩子《りんご》
ブロンズ／込型真土焼型鑄造
秋田公立美術工芸短期大学 2009 年度優秀賞</p> <p>B. 宇野未沙貴《あなたのなかに》
洋白
秋田公立美術工芸短期大学 2010 年度優秀賞</p> <p>C. 滝川ふみ《重力にひかれて》
ガラス／ネットワーク
秋田公立美術工芸短期大学 2009 年度優秀賞</p> | <p>D. 江頭香織《金光の波形》
真鍮
秋田公立美術工芸短期大学 2006 年度優秀賞</p> <p>E. 阿部 葵《百鬼徒然夜行》
油彩
秋田公立美術工芸短期大学 2003 年度優秀賞</p> <p>F. 市川寛士《生きてきたもの》
ブロンズ／蠟原型、真土焼型鑄造法
秋田公立美術工芸短期大学 2012 年度優秀賞</p> | <p>G. 戸田雅子《うるしオブジェ》
木・漆
秋田公立美術工芸短期大学 2003 年度優秀賞</p> |
|--|---|---|



〈知覚〉の在処

「みえないものに心を惹かれる」という後藤那月は、体験をビジュアルイメージに置き換えたり、身体を用いた表現を空間に展開することなどによって、人間がみえないものと対峙した際に生じる知覚の在処を探る。それは個人の記憶よりも遠く、「人間の知覚のはじまりに結びついているのではないか」と考える後藤の活動の軸は、「移動」することにあつた。

「複数の土地を歩き来することで、人間の無意識の領域や土地の類似性を知ることができるのではないか」という後藤の問いは、俯瞰的な視点と離れた事象同士を結びつけることを可能にしたという。「特に重要なのは、できる限り自身の足で歩くこと、気配の残る場所を探すこと」。そうして意識をもって周囲を観察し、みえないものを見るための身体をつくる。「地面は動き、風景はいつも同じではない。だから歩くことを通じて何度でも土地を理解し直さなければいけない」と語る。

《胎虚、或いは安息の地で》は、2023年秋、北アルプス標高2,600m付近に位置する溶岩大地、雲ノ平へと足を運んだ体験を背景とする。

「朝4時、小屋を出て真っ暗な闇の中をヘッドライトひとつで歩く。ハイマツや岩には霜がおり、固く付着している。昨夜の大雨は丘の窪地に溜まり、それがピンとした水鏡となっていた。樹皮の片側にのみついた氷が夜にふく息吹の強さを想起させる。山の影から日が登り、段々と熱を帯びる身体。手指を押し付けると木先から一夜分の時間が溶け出していく。音もないこの場所で、世界の動きだす気配を予感する。旅先での体験から、自身の記憶の中だけにある風景を空間に描き出すことを試みる。その不在の風景を『安息の地』と称し、まだみぬその姿を追い求めている」

《胎虚、或いは安息の地で》時間、塩、水、土、水性樹脂



私は、みえないものに心を惹かれる。それは時に、肌をかすめるような気配として感じられたり、傷を掘りおこされるような痛みであったり、みえない風景として記憶を揺らしてくる。それらすべては個人的記憶よりも遠く、人間の知覚のはじまりに結びついているのではないかと考える。人間がみえないものと対峙した際に生じる知覚の在処を探るべく、体験をビジュアルイメージに置き換えたり、あるいは身体を用いた表現などを空間に展開し鑑賞体験として提示することで模索し続けている。近年は歩くという行為を続け、旅先のリサーチと個人的な体験の交わりをもとに制作活動を通して発表を行ってきた。

私の活動の軸となるのは移動することである。これまで行ってきた旅の大半は、振り返ると目的のない移動であった。しかし複数の土地を行き来することで、人間の無意識の領域や土地の類似性を知ることができるのではないかと考える。まれびとであることが俯瞰の視点を持ち、離れた事象同士を結びつけることを可能にする。

特に重要なのは、できる限り自身の足で歩くこと、気配の残る場所を探すこと。そしてその土地に住む誰かを知ること。その土地にまつわる歴史や風土について文献で知るよりも、そこに住む人々がかたちつくってきた個人的痕跡に関心があり、実際に会い見聞きした要素からその土地を理解していく。そうして私が歩いたエリアはほかの土地からは離れた島となり、その旅自体に普段の生活からも物理的/精神的な距離が生まれ、周りを観察する際の意識も変えてくれる。これは、みえないものを見るための身体をつくるために重要な点である。地面は動き、風景はいつでも同じではない。だから歩くことを通じて何度でも土地を理解し直さなければいけないと思う。

薄い円盤に張られている塩水は、時間をかけるごとに外気に触れることで蒸発し、水分が失われていく。同時に塩が現れ、時に温度変化によって結晶が独自の模様を成す。例えばこの円を覗きこみ、離れて、また覗きこむとする。すると先程はなかった（かもしれない）模様がみえてくる。

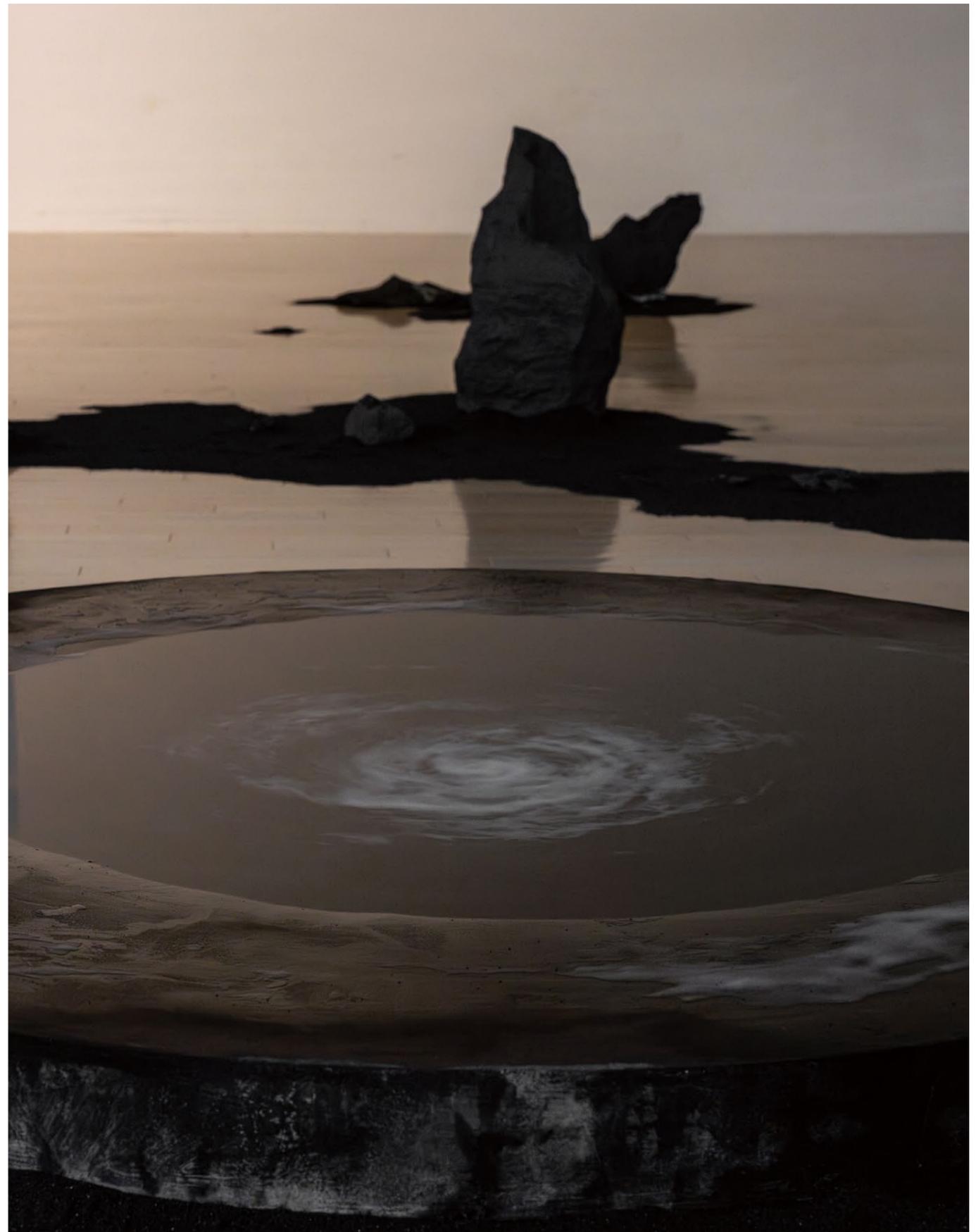
瞬間的に現れ、また瞬時に過ぎていくときのなかで、発生し変化を続けていくいまの断片に向き合うという行為。その事実を認識できるのは私たちが同じように"いまここ"に存在するからである。この思考が、私の思うはじまりに触れるための一歩だと考えている。

鉱物はカタチが残らないものの来歴を知るための手がかりになる。

点在している岩は、私の手によって形作られた偽岩であり、私の時間が蓄積したものだ。ある土地で拾った小石をランダムに粘土に押し付ける。小石が形を決める。拾った土地の記憶と、私がこの偽岩を形作るまでの記憶や時間がとどめられている。

鉱物は物質としても強い存在をもつが、対して自然の変化と共にその身を幾度となく変える。その時々その土地に存在しながらも、土地の過去を内包し、記録/記憶しているのだ。例えば巨岩のかけらが崩れ年月をかけて浜辺に辿り着く。それは土地と土地を繋いでいると考える。

後藤那月（ごとう・なつき）| 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。流動的に土地を渡り個人的体験と現地でのリサーチの交わりから、人類普遍の原始的な知覚や目でとらえられない風景の変化を探るべく表現を続けている。個展「nowhere "Where Do We Come From"」（YAU STUDIO / 東京、2023）、個展「息の緒の通い路」（新屋NINO / 秋田、2022）など。



未知の〈音色〉

音の鳴る陶器を制作する矢崎舞子キアラの《土楽器》は、土でできた楽器の少なさに気づいたことから生まれた。さまざまな楽器の演奏経験を活かし、多種多様な奏法を土によって生み出すことは可能なのかを研究する。制作するのは、従来とは異なる造形、色、質感の楽器である。

赤土を手捻りした楽器には、音を鳴らすために必要なポイントがあるという。穴の縁に当てる息の角度の重要性を知り、クリアな音がより明確に鳴る角度を追求。また、一吹きでハーモニーを作るために大きさの異なる笛を合体させ、それぞれの本体に音階を変える穴を開けることでハーモニーの組み合わせを増やし、音にバリエーションをもたせる。造形前から音を想像して形をつくり、その音のイメージを描いて釉薬をかける。

矢崎の作品は制作だけでは終わらない。演奏では、お互いが鳴らす音を探り合いながら重ねていく。見る人、聴く人には、音を想像してもらおう。どんな音が鳴るのか、どんな音の組み合わせが生まれていくのか。〈音色〉も〈音階〉も未知の土の楽器から、新たな音が生まれていく。

《純・土楽器》赤土、手捻り



それぞれの楽器には、音を鳴らすために必要なポイントがある。ホイッスルの構造を研究。穴の縁に当たる息の角度が重要であることがわかり、より明確にクリアな音が鳴るよう、息の通り道に障害物がないようにした。本体と吹き口を分けて作り、音が鳴る角度を見つけてから合体させた。一吹きでハーモニーを作りたいと思い、大ききの違う笛を合体させた。さらにそれぞれの本体に音階を変える穴をあけることで、ハーモニーの組み合わせを増やし、音にバリエーションをもたせた。

従来の楽器とは違う形にすることで、見る人に音を想像してもらう。造形前から音を想像し、その音のイメージを形にしていく。全て形は違うが奏法や構造は同じであり、音に影響の出ない範囲で造形している。

ひとつの楽器が出す音は、人の数ほど存在する。吹き方だけでなくその時の気分で出る音も変わる。

見たことも触れたことも奏でたこともないものを手に取り、音を出す。すると、自分が想像していた奏で方とは違うやり方で音を出す人や、自分があまり出せなかった音を綺麗に出す人、個性の出し方がそれぞれ違っていた。しかしリズムの取り方や音の変え方、鳴らすタイミングにはそれぞれの想いが一つになり、つまり瞬間はなかった。進行のリードをする人、ループする人、拍子の頭で音を出しアクセントをつける人が自然と出来上がり、一つの音楽ができた。ピアノのように音階が変わるものではないため、純粋に音だけに集中して演奏することができる。ちょっとしたズレを気にして緊張することがないからである。

これからの土楽器はどうなってゆくのか。新たな土楽器を交えて音を広げていく。セッションだけでなく、音を追求した上で作曲をする、実験的要素のある楽器である。

矢崎舞子キアラ（やぎき・まいこ・きあら）| 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻卒業。陶芸とガラスを学び、土でできた楽器が少ないという気づきから生まれた“土楽器”（どがっき）を制作。さまざまな楽器の演奏経験を活かし、音の出る仕組みや土で表現するための研究と実験を重ねている。



記録すること、記憶すること 絵画を描くこと

「絵画作品と鑑賞者を含めた展示空間」をテーマに制作を続けるおおだいらまこ。そもそも絵画作品とは何かという疑問のもと、平面的ではない絵画や壁掛けではない展示形態にするなど、鑑賞者と絵画作品がより親密な関係を築くための試みを行っている。

本展における《〇頂天-ウチョウテン-》は、自らがスマートフォンで撮影し、カメラロールに保存された日常の風景写真をもとにしている。「レンズを通した風景は、なぜか形や色が異なるように感じる。その写真をより正しく、自分が納得できる〈記録〉にするにはどうしたら良いのかを考えた」というおおだいらが、フォルダ内の写真をピックアップし、PC上にて線と色を抽出して加工。キャンバスロール紙にプリントし、その上からアクリル絵の具で加筆して仕上げる。《食卓》《潮干狩り》《海》《暮れ時》《堤防》などの何気ない日常が、加工と加筆によって曖昧になっていく。鮮明なはずだった〈記録〉と、鮮明さとおぼろげさが混在する〈記憶〉。記録すること、記憶すること、そして絵画を制作することの3つが重なる部分を見つけ出すことが、現在のおおだいらの題材でもある。

〈記録〉と〈記憶〉、それぞれの混在のなかで、経験を正しく記憶すること。おおだいらの試みから見えてくる〈絵画〉とは。



左：《頼まれごと》アクリル、キャンバス

右：《〇頂天-ウチョウテン-》インクジェットプリント、アクリル、キャンバス

近年、美術作品の鑑賞方法の一つに作品の写真を撮る、また作品と一緒に写真を撮るといった方法が増えたように感じます。その鑑賞方法に対して、作り手側として思うところもありましたが、思い返せば私自身も日常生活の中で頻繁に写真を撮るタイプで、それと同じことだと気づき、むしろ写真を撮ってくれてありがとうなのでは？と思い直しました。

そして、改めて私たちが写真を撮る意味や理由は何なんだろうかと考えました。

現在、写真は誰でも簡単にすぐに撮ることができ、写真を撮らない日はないのではないかと思います。しかし大半の写真は撮影した後あまり見返すことがありません。それにもかかわらず、不思議なことに、一度撮影した写真のデータはなかなか削除できず、クラウドサービスにお金を払ってまで残しておいている現状があります。

そう考えると、私たちがたくさん写真を撮る意味や理由というのは、誰かに共有するためというより、自分の中に残しておきたい＝忘れたくないという欲望なのかなと感じます。

日常や当たり前というのは結構すぐなくなるもので、何かが起きてこれまでの生活が変わると以前の日常がどうであったかを思い出せないということがよくあります。何かが起きた時、それが起きたことばかり考えてしまいますが、それによって何が変わったのか、そのことを思い出すことが本当は必要で、そのために正しい記録が必要だと思うのです。

しかし、写真は目で見たそのままを完全に再現できるわけではなく、レンズを通した風景は形や色が異なるように感じてしまいます。ではその写真をより正しく、自分が納得できる〈記録〉にするにはどうしたら良いのかと考え、この作品を制作しました。

作品は基本的に写真を上からぞって制作しています。その過程で写真では捉えきれない遠近感を足したり、色味を修正したりしています。元となる写真は作者である私自身が撮影し、スマートフォンのアルバム内に保存されているものから選びました。普段見返したりはしないけど消せない写真、それには自分が大切にしようとしている日常が入っている気がしたからです。

また、写真を撮る際はアプリケーションの機能などは使わず、自分の手で描いていますが、それは絵に描いて初めてその形を知る、という感覚があるためです。普段よく見ているはずのものでも、それを描こうとよく観察すると何かしら新しい発見があります。何かを描いてみると自分が普段いかに物事をいい加減に見ているか気付くのです。

写真を見て思い出すことがあるように、写真にはうつらないこともあって、それと同時に絵に描かないと気付かないこともあったりします。そしてその3つが重なったこの作品は、より正しい記録に近づいているのではないかと思います。

おおだいらまこ | 1995年青森県生まれ。「絵画作品と鑑賞者を含めた展示空間」をテーマに作品制作を行う。展示形態を一般的な壁掛けではないものにしたりと、絵画作品とは何かという疑問のもと平面的ではない絵画作品を制作するなど鑑賞者と絵画作品がより良い関係性を築くための研究を続けている。公開制作「おおだいらまこ→ハッピーライフ」(秋田市文化創造館/秋田、2023)、第22回グラフィック「1_WALL」展(ガーディアン・ガーデン/東京、2020)など。

下(左から):
《大きい橋》アクリル、キャンバス
《釣り》アクリル、キャンバス



〈風景〉を供養する

風景から人の営みの痕跡を読み、絵を描くことで風景を供養する大東忍。風景を歩く・踊る・描くなどの実践を重ねることで身体を澄まし、風景を踏みならす。それは、「ひとりで風景に残る痕跡（＝過去の人たちの声、営みの跡）に身体全体を傾けることで引き受けることであり、祈り」だという。

本展の《例えば灯台になること》は、大東自身が風景のなかにおいて灯台になり、風景の一部となることでその風景を受け入れ、読み、同時に風景をつくる試みである。風景と対峙した公開実践「例えば灯台になること」（2024年5月11日、6月1日実施）では、参加者はガイドブックの地図を頼りに土地をめぐり、たどり着いたビューポイントで「灯台」を見つけ、風景の写真を撮る。それを用意されたウェブサイトアップロードすることで風景の共有を試みた記録である。

一方、大東が描く木炭画は、自らが盆踊りを踊ることで歴史化されてこなかった人の営みの風景を供養し、記録する。「供養の踊りであり、身体を解放し、身体を澄まし、踏みならすことで風景の供養を試みる」という。

そして、それらを描くこと。

木炭画で描かれた営みの風景が、夜の帳に沁みていく。



風景から過去の営みの痕跡を読み、「風景を供養する」。

風景を歩く・踊る・描くなどの実践を重ねることで「身体を澄まし」、「風景を踏みならし」てきた。それはひとりで風景に残る痕跡（＝過去の人たちの声、営みの跡）に身体全体を傾けることで引き受けることであり、祈りだ。

木炭画では夜の影のなか、盆踊りを踊る人物がいる光景を描いた。盆踊りは供養の踊りであり、踊ることで身体を解放的な状態にする（＝身体を澄ます）。また、盆踊りにおいてかかとを地面に叩きつけるような動作は鎮魂の祈りを込めた呪術的な動作からくるといふ。踊り、踏みならすことで風景の供養を試みる。木炭の粒子的な質感は物語る夜の深い影を画面に刻む。描くこともまた、歴史化されてこなかった営みの風景の供養だ。

《例えば灯台になること》では作家自身が「灯台になる」ことで風景に対峙すると同時に、風景の一部となり、風景をつくった。

参加者はガイドブックに載っている地図を頼りに横浜をめぐる。たどり着いたビューポイントで見つけた「灯台になる人」のいる風景の写真を撮り、用意されたウェブサイトにアップロードすることで風景の共有を試みる。本展では2024年5月11日と、6月1日におこなった公開実践「例えば灯台になること」の記録を展示する。各日19時から21時まで、灯台になる人として風景の一部になった。

大東 忍（だいとう・しのぶ）| 1993年愛知県生まれ。2019年愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程修了。風景から人の営みを読み取るために歩く・踊る・描く実践を行っている。「VOCA展2024 現代美術の展望-平面の作家たち」（上野の森美術館／東京、2024）にてVOCA賞受賞、個展「TOKAS-Emerging 2023『風景を踏みならす』」（トーキョーアーツアンドスペース／東京、2023）、「なめらかでないしぐさ 現代美術 in 西尾」（康全寺／愛知、2023）など。



上（左から）：
《踊り場（秋田市下浜名ヶ沢、郡上おどりかわさき）》木炭、麻布、パネル
《踊り場（秋田市浜田、白鳥おどり 世栄）》木炭、麻布、パネル
《風景を渡る》木炭、麻布、パネル
《踊り場（秋田市御野場、Sleep No More）》木炭、麻布、パネル

下：
《例えば灯台になること》公開実践の記録資料、映像（31分32秒）

確かに揺れ動くもの

「あってもなくても良いもの」と聞いて、何をイメージしますか？秋田公立美術大学卒業制作展における月居凜《M 0.40》は、そんな問いかけから始まった。大学を中心に営まれていく日々の生活や課題の中で、「あってもなくても良いもの」に興味を惹かれた月居は、さまざまな「もの」を探していく。その過程で故郷である北秋田市の阿仁合町に注目し、荒れた「北緯40度線」モニュメントに目を向けた。

「北緯40度線」は、ヨーロッパから中国、日本、アメリカへと続く緯線。日本では秋田県の男鹿市から八郎潟干拓地、阿仁合町、鹿角市などを通り岩手県へと続く。阿仁合町に存在するモニュメントを確認した月居が決めたのは、その周辺を掃除することだった。

始めたのは、モニュメント周辺の草刈りだ。北緯40度線上に位置する市町村名が刻まれた標石の清掃、そして、観察。冬には除雪場所となり、雪に埋まる周辺の雪かきに明け暮れた。雨の日には地元を歩き、資料を読み、会話をした。〈清掃〉〈観察〉という行為を90日間に渡って繰り返した。

《M 0.40》は、設立されて30年経ったモニュメントの存在価値や意義をきっかけとした、モニュメントとその場所で起こった出来事の記録。1日のなかで起こる、微細だが確かに揺れ動く〈日常〉である。



《M 0.40》映像

「あってもなくてもいいもの」を探して制作に臨んだ際、「北緯40度線」に目を向けた。それは、故郷にある北秋田市阿仁合町の北緯40度線モニュメントの存在である。数十年の中で、なぜ突然価値を与えられ、今日まで荒れた状態で残されていたのだろうか。そして、北緯40度線モニュメントが存在する意義とは一体なんであるのか？3カ月にわたってモニュメントと向き合い、〈清掃〉〈観察〉という行為を繰り返して状態を保ち、還元した。戻ったものと、戻らなかったもの。微細であるが、確かに揺れ動く日々の記録。

月居 凜 (つきおり・りん) | 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学景観デザイン専攻卒業。秋田の景観に存在する「あってもなくてもいいもの」について研究。故郷の秋田県北秋田市阿仁合町に存在する北緯40度線モニュメントに注目した卒業制作《M 0.40》をきっかけに、「北緯40度線」プロジェクトを展開。



《M 0.40》映像

07 | 関連イベント

Events

【アーティストトーク】

日時 | 2024年7月21日(日) 16:00~18:30
 場所 | 秋田市文化創造館スタジオA1
 作家 | 第1部…大東忍、後藤那月、月居凜
 第2部…大平真子、矢崎舞子キアラ、
 土楽器ライブ

土楽器演奏 | 高橋琴美、早坂葉、矢崎舞子キアラ
 来場者数 | 102人

第1部と第2部に分け、作家によるトークと土楽器ライブを開催。
 作家それぞれが作品や制作について話した後、
 質問を合行うクロストークを行った。
 トーク後は土楽器ライブを行い、希望する参加者と共に
 土楽器ごとに異なる音を奏でた。



【土楽器ライブ】

日時 | 2024年7月27日(土) 13:30~14:30
 場所 | 秋田市文化創造館スタジオA1
 土楽器演奏 | 早坂葉、矢崎舞子キアラ
 来場者数 | 135人

矢崎舞子キアラが出演した土楽器を使い、会場にて早坂葉と
 共に演奏しながら作曲を試みた。

08 | アーカイブ

Archive

【ウェブ記事】

プレスリリース <https://www.artscenter-akita.jp/archives/51105>
 レポート <https://www.artscenter-akita.jp/archives/52393>
 レビュー 執筆 | 村上由鶴 <https://www.artscenter-akita.jp/archives/52442>
 トーク記録 9月公開予定



【映像】

ティーザー映像 https://youtu.be/Q_r_OiFmu7c
 ※撮影・編集 | 安藤帆乃香 監修 | 石田駿太
 アーティストトーク 第1部 9月公開予定
 第2部 9月公開予定
 ※撮影・編集 | 石田駿太、安藤陽夏里、大黒花菜子

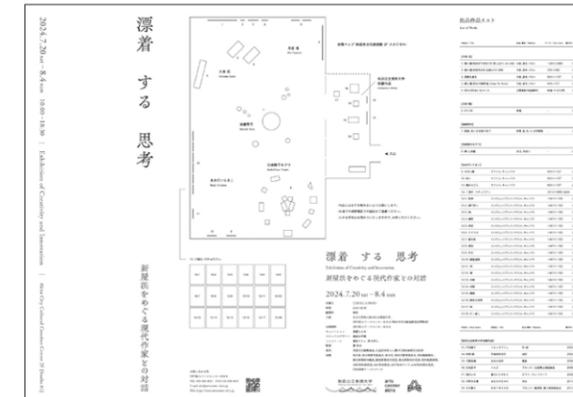


【報道】

秋田経済新聞(2024年7月17日掲載) <https://akita.keizai.biz/headline/3900/>
 秋田魁新報社(2024年7月26日掲載)

【印刷物】

チラシ A4サイズ(4c+1c / 4c+1c)
 ポスター B2サイズ(4c+1c)
 ハンドアウト A3サイズ(1c / 1c)
 ※デザイン | 越後谷洋徳



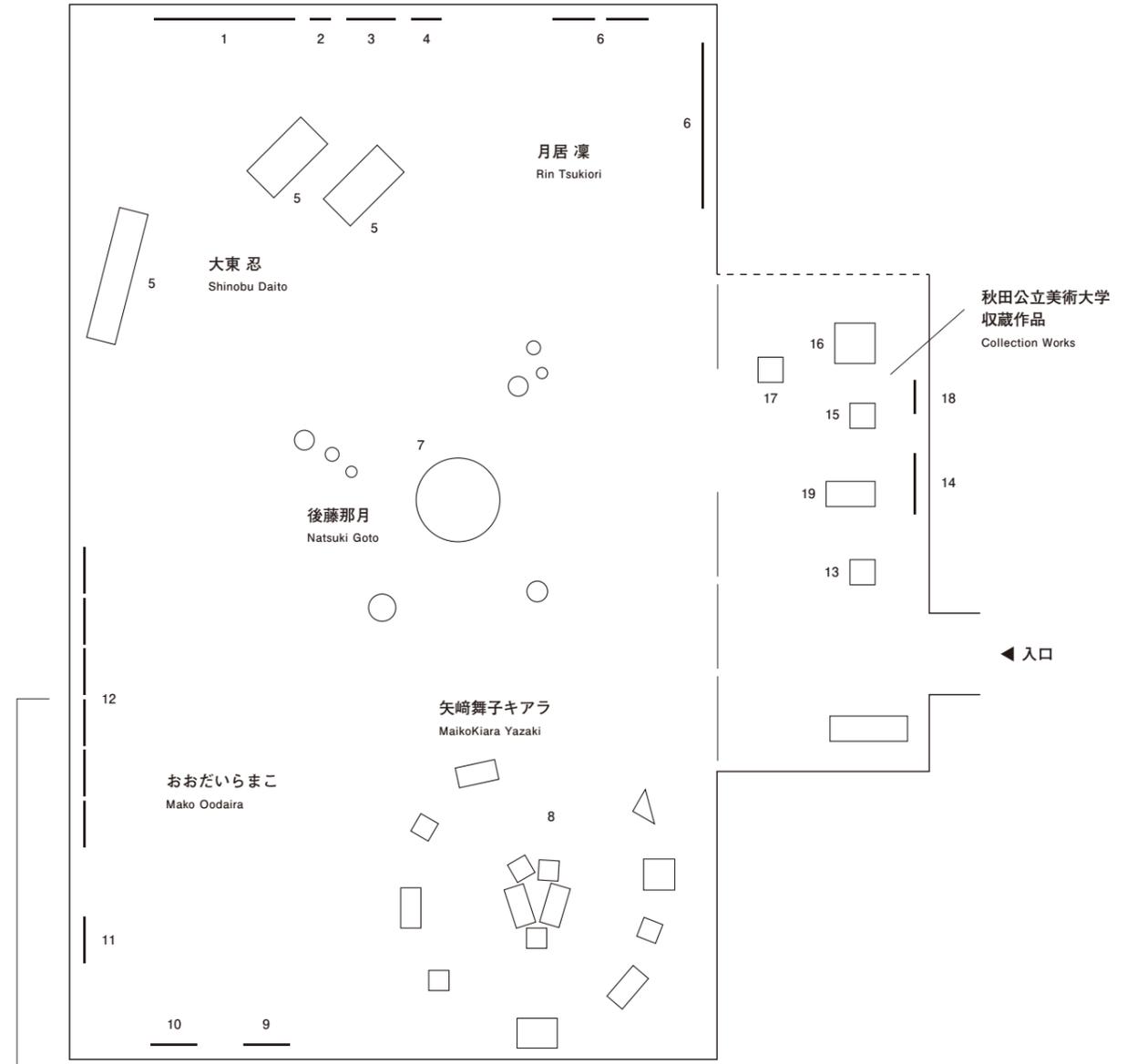
09 出品作品リスト

List of Works

No.	作家名 / Artist Name	作品名 / Title	技法・素材 / Medium	サイズ / Size (mm)	制作年 / Date
1.	大東 忍	踊り場(秋田市下浜名ヶ沢、郡上おどり かわさき)	木炭、麻布、パネル	1455×3360	2023
2.	大東 忍	踊り場(秋田市浜田、白鳥おどり 世栄)	木炭、麻布、パネル	500×606	2024
3.	大東 忍	風景を渡る	木炭、麻布、パネル	910×1167	2024
4.	大東 忍	踊り場(秋田市御野場、Sleep No More)	木炭、麻布、パネル	606×727	2022
5.	大東 忍	例えば灯台になること	公開実践の記録資料映像	31分32秒	2024
6.	月居 凜	M 0.40	映像	-	2024
7.	後藤那月	胎虚、或いは安息の地で	時間、塩、水、土、水性樹脂	-	2024
8.	矢崎舞子キアラ	続・土染器	赤土、手捻り	-	2024
9.	おおだいらまこ	大きい橋	アクリル、キャンバス	910×1167	2023
10.	おおだいらまこ	釣り	アクリル、キャンバス	910×1167	2024
11.	おおだいらまこ	頼まれごと	アクリル、キャンバス	910×1167	2024
12.	おおだいらまこ	〇頂天 -ウチョウテン-	-	3310×6850(全体)	
12-1.	おおだいらまこ	食卓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-2.	おおだいらまこ	潮干狩り	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-3.	おおだいらまこ	海	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-4.	おおだいらまこ	機窓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-5.	おおだいらまこ	車窓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-6.	おおだいらまこ	ラクヨウ	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-7.	おおだいらまこ	暮れ時	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-8.	おおだいらまこ	堤防	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-9.	おおだいらまこ	天井	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-10.	おおだいらまこ	高速道路	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-11.	おおだいらまこ	雨	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-12.	おおだいらまこ	春	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-13.	おおだいらまこ	水面	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-14.	おおだいらまこ	初詣	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-15.	おおだいらまこ	裏庭	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-16.	おおだいらまこ	曖昧な時間	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-17.	おおだいらまこ	松	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-18.	おおだいらまこ	引っ越し	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024

【秋田公立美術大学収蔵作品】

13.	戸田雅子	うるしオブジェ	木・漆	-	2003年度
14.	阿部 葵	百鬼徒然夜行	油彩	-	2003年度
15.	江頭香織	金光の波形	真鍮	-	2006年度
16.	石毛彩子	りんご	ブロンズ／込型真土焼型鑄造	-	2009年度
17.	滝川ふみ	重力にひかれて	ガラス／ホットワーク	-	2009年度
18.	宇野未沙貴	あなたのなかに	洋白	-	2010年度
19.	市川寛士	生きてきたもの	ブロンズ／蠟原型、真土焼型鑄造法	-	2012年度



12. 〇頂天 -ウチョウテン-

12-1	12-2	12-3	12-4	12-5	12-6
12-7	12-8	12-9	12-10	12-11	12-12
12-13	12-14	12-15	12-16	12-17	12-18

会場マップ:秋田市文化創造館 2F スタジオA1



漂着する思考 - 新屋浜をめぐる現代作家との対話 -

展覧会

会期	2024年7月20日(土)～8月4日(日)
会場	秋田市文化創造館 2F スタジオA1
主催	公立大学法人秋田公立美術大学、 NPO法人アーツセンターあきた(秋田市文化創造館指定管理者)
企画制作	NPO法人アーツセンターあきた
キュレーション	高橋ともみ
ビジュアルデザイン	越後谷洋徳
インストール	國政サトシ、青木邦仁
監修	藤 浩志
助成	芸術文化振興基金、公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団
後援	秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会、秋田魁新報社、 朝日新聞秋田総局、読売新聞秋田支局、毎日新聞秋田支局、秋田経済新聞、 NHK秋田放送局、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送、 CNA秋田ケーブルテレビ

報告書

2024年9月発行	
編集	高橋ともみ(NPO法人アーツセンターあきた)
デザイン	越後谷洋徳
写真	伊藤靖史(クリエイティブペグワークス)
発行	NPO法人 アーツセンターあきた 〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3 アトリエももさだ内 電話:018-888-8137 メール:info@artscenter-akita.jp

本書の無断複写・複製・引用等を禁じます。

© arts center akita 2024

有相無相の漂着物が、〈風土〉を形成する

漂着

思考

arts
center
akita